

福祉機器開発プロジェクトの現状と役割

外 谷 富二男（城北地域労働組合協議会／協同総研常任理事）

1. いきさつ

いま、労働者協同組合グループの手で福祉機器の開発が進められている。具体的な商品としては「音声体温計」と「点字式電子手帳」である。特に「音声体温計」については遅くとも年内には生産・販売が可能となるようにスケジュールが組まれている。

商品名からもわかるとおり、いずれの商品も視覚障害者の方々が使用するものである。なぜ、いま音声体温計なのか、という点についてはいきさつがある。

昨年3月、広島で開かれた「第4回生協と共同作業所の提携活動全国交流会」にシンポジストとして協同総研の菅野専務が参加した折、「がんばる作業所」の久保正道さんから福祉機器開発への協力依頼を受けたことに始まる。

その後、5月になって広島から上京した久保さんが協同総研を訪ねて来られ、あらためて、「音声体温計」「点字式電子手帳」「車椅子のリモコン化」の3点について具体的な開発要請があった。この時、立合った(株)タウ技研代表の都筑さんによれば「開発を進める上で技術上の困難さはない」とのことであった。しかし、協同総研はその頃、「いま、協同を問う '92全国集会」の準備に追われていた時期でもあり、私自身も分科会を担当していた関係で具体的な動きが出来ない状態であった。6月末の京都での協同集会も成功裡に終り、一段落した、8月になって日本点字図書館（日点）や全日本視力障害者協議会（全視協）を訪問して聞き取り調査を行なうことが出来た。そして、わかったことは次の様なことであった。

(1) 「音声体温計」は過去に某メーカーが厚生省からの助成も得て商品化したが、市場が狭く（視覚障害者は全国で30数万人）採算が合わない、ということで生産を中止したままになっているこ

と。

(2) 厚生省に再三、要請をしているが「製造する会社が見つからない」という理由で事実上、放置されたままになっていること。

(3) 一方、視覚障害を持つ方々の間では自分の体温はもちろん、子供の体温を親として確認することが出来ず、不安な日々を送っている現実があること。

などである。特に全視協の内田邦子副会長の「いま、視覚障害者でも子供を持つ人がふえてきました。大人である私たちは多少熱があってもそれなりの対応ができるのですが幼い子供が熱を出した時、体温がわからないために適切な処置がとれずにいることが親としてとてもつらく、子供にも申し訳ないと思うのです。」という言葉に私はただ絶句するほかはなかった。

6月の協同集会の成功は「労働者協同組合グループ」の活動を促進するキッカケともなったが7月以降、毎月開かれた会合の席でも「福祉機器の開発」が常に話題となり、12月のグループ準備会発足にあたって、事業計画の大きな柱の一つとして位置づけられ、プロジェクトチームの発足となった。（「労働者協同組合グループ」については『協同の発見』誌第12号18ページの菅野報告参照）

この間、久保さんや全視協の市川会長らが何度となく横浜の(株)タウ技研に足を運ばれ、熱心に開発要請が行なわれ、これを受けた(株)タウ技研においても開発担当者が決められ、準備が着々と進められていたことがチーム発足の大きな要因となったことは言うまでもない。

2. 現 状

当面、開発対象としている機器は前記した2種であるが開発から販売に至るまで、供給する側と使用する側が協同して進める、ということを基本スタンスにしている。これまでの商品のようない

方通行的なものでないものをつくろう、ということである。当然と言えば当然のことであるがこうしてはじめて使い勝手の良い商品が生まれるのではなからうか。更に、「音声体温計」については視覚障害者のための機器ということだけでなく、視覚障害者も使用できる機器、という考え方も重視しているので汎用性のある機能と価格設定を追究している。こうした考え方も視覚障害者の方々の参加があったからこそ発想である。「これまでいろいろとメーカーに要請したがなかなか取り上げてもらえない。我々は誰もが使う機器に我々も使えるようなちょっとした工夫と機能を付加してもらえば良いのです。」と言う。例えばどの家庭でも使う電子レンジ。最近のものはとくに凹凸のないスイッチが多用されているがあれほど使いづらいものはない、とのことである。「凹凸のあるスイッチだからといって普通の人が使いづらくなるのでしょうか。」と言うのが彼等の意見である。最悪のものは銀行の自動引出し機である。ディスプレイ上に指を置くだけであるから視覚障害者は使用できない。「あれを考案した人は我々のことが全く視野に入っていないのではないか。」こうした機器開発の発想も人間発達という視点でみれば一つの障害と言えるのかも知れない。

開発プロジェクトは12月の発足以降、毎月1回定例の会合を開いている。現在までのところ、参加メンバーは障害者とその団体、中小企業家、技術者、デザイナー、労働組合、地方議員、研究者などである。仕事のほしい人、仕事に協力できる人、興味のある人、関心のある人なら、誰でも参加できることになっているのでこの誌上を借りて多くの方々に参加を呼びかけたい。直接、会合に出席できなくともいろいろな参加の方法が考えられる。様々な情報の提供、人の紹介、アイデア・意見・アドバイスを寄せていただくことも参加のしかたのひとつと思う。こうした方々には当然、情報のフィードバックがなされるようにしたい。

3. その役割

ある商品を必要とする人々がいて、よい仕事・よい商品をつくりたいという人々や企業があり、

面白そうだからかかわり合ってみよう、という人々もいて、それらが協同して一つの商品を生み出す。言葉にしてしまえばあたり前で何の変哲もないことであるがそうしてつくり出された商品とそのシステムの持つ意味と可能性は大きいものがあると思う。私自身の問題に引き込んで考えてみれば、なが年、中小企業での労働組合運動を通じて中小企業（家）や自治体、政府に諸要求をつきつけ実現を迫る、というスタイルが身につけてしまっている。大部分の労働組合も似たような状況にあらう。これはこれとして今後も要求実現の道として重要なやり方ではあるがその道だけに固執していたのでは要求実現が出来ない中小企業の現実がある。「必要なものは自分たちの手で実現する（つくる）」という視点と実践が加われば中小の労働組合運動もこれまでと違った展開ができるのではなからうか。「要求もするが自分たちもつくる」労働組合運動は構造不況業種からの転換、業績悪化からの企業建て直し、中小企業内での民主的改革、未組織の組織化といった課題が中小企業経営者との対立という構図ではなく、協同の事業として進めることも不可能ではない、と考える。もちろん容易にしかも短期間でできる道とは考えていないがさしあたって必要なことは私自身を含め、労働者の自己改革と自己研鑽であろう。これまで労働の質を問うような労働組合運動をしてこなかったツケが今、私の前に大きな壁として立ちふさがっている。幸いなことにこのプロジェクトチームは一企業の枠を超えて優秀な技術者やデザイナーといった専門家が集まっているので刺激を受けること大である。

いま取りくんでいる「音声体温計」にしても、ある大手のメーカーが現在開発中であり、夏にも発売予定である、との情報がある中で同様の商品を世に問うことはその商品やつくり方の中に私たちにしか出来ない何かが付加されていなければ成功はおぼつかないであろう。そうした意味では私たちの力量がいろいろな面で問われ、試される機会でもある。成功させることが出来れば労働者協同組合運動にとっても障害者の運動にとっても大

きな一歩となる。「視覚障害者の発想はヒモ（線）の発想なのです。点字で読んでいくものですから平面的な発想もしにくいのです。まして立体的な思考はととてもとても……。でもそんな機器がほしいですね。」「点字が読める人は全体の2割にも達しません。多くの人が自分の狭い世界に閉じこもっているのです。」こうした現状を聞くと、この福祉機器開発プロジェクトのあるべき姿が見えてくる。視覚障害者だけでなく、今後は様々な障害

を持つ人々との協同ネットワークをつくり上げながら、必要とされる商品の提供にとどまらず、労働の場、雇用の場の提供も出来るような役割が担えるようになりたいし、このプロジェクトに参加する、障害者もそうでない人も誰もが視野を広げ、世界を広げられるような関係をつくりたい、と考えている。

「音声体温計」は初めの一歩である。

「第3回会員総会」「協同政策研究交流集会」のお知らせ

《第3回会員総会》

日時 1993年6月26日（土） 14：00～18：00
13：30開場
会場 日本青年館（東京・青山）
内容 第1部：92年度事業総括、決算、93年度事業計画、予算
第2部：バーク報告をめぐる総括討論、各地の活動報告と討議
※引き続き夜には「レセプション」を行ないます。

《協同政策研究交流集会》

日時 1992年6月27日（日） 9：00～16：00
開場 日本青年館（東京・青山）
内容 分科会①ごみ・環境問題、②高齢者協同組合、③法制、④教育・文化協同組合
※宿泊ご希望の方は青年館で用意してありますので、ご連絡下さい。詳しくは別途案内状を送付予定。または次号（14号）を参照のこと。
※なお第2回全国理事会を5月8日（土）11：00～16：00、全共連ビル（東京・永田町）にて開催。

受贈図書文献

1992年10月より12月

単行本

- 大内力監修、生協総合研究所編集『協同組合の世紀—生協運動の新たな発展をもとめて』（コープ出版、92年12月）
- 栗田健編著『現代日本の労使関係』（労働科学研究所出版部、92年8月）
- 姉崎繁、草間俊夫、増田壽男編著『危機における現代経済の諸相』（八朔社、92年5月）
- 真田是編集代表、日本の福祉はこれでいいのか編集委員会編『日本の福祉はこれでいいのか』（あけび書房、92年10月）
- 鈴木敏正『自己教育の論理—主体形成の時代に』（筑波書房、92年11月）
- 川端正久、佐々木建編『南部アフリカーポスト・

- アパートヘイトと日本』（勁草書房、92年7月）
- 根井康之『西田哲学で現代社会を観る』（農山漁村文化協会、92年9月）

定期刊行物

- 『障害者のゆたかな未来をめざして』（月刊）第122号～125号（愛知県・ゆたか福祉会、92年7月～10月）

文献・資料

- 角瀬保雄「転機に立つスペイン・モンドラゴン協同組合」（『法制大学経営学会・経営志林』第29巻第2号、92年7月、抜刷）
- 子どもたちの生協運動研究会（名古屋勤労市民生協内）「きっず・こーぶ」（91年10月）